



# 北方民族博物館だより

## No.118



### HA74 演説用杖

北西海岸先住民 カナダ/ブリティッシュ・コロンビア州(推定)

全長168.7cm 直径5.2cm 20世紀後期製作(推定) 1990年収蔵

「トーキング・スティック」または「演説者の杖(Speaker's Staff)」と呼ばれる儀礼用の杖である。北米北西海岸の先住民社会ではポトラッチなどの祭宴において、世襲制の「演説者」やチーフがこうした杖を持ちながら演説を行った。発言を強調したい時は杖で地面を叩いた。こうした杖はしばしば一族の神話的出自や歴史などが彫刻されており、また「演説者」という地位を象徴する重要な道具でもあった。

### 目次 Contents

- 1 表紙 演説用杖
- 2-4 第35回特別展「北で生きるよすが 北方民族の世界観」  
／講座「北海道の古代集落遺跡をめぐって：炉とかまど」
- 5 ウェルカムケース「ハマニンニクのバスケット」
- 6 INFORMATION



## 北海道立北方民族博物館第35回特別展

### 北で生きるよすが 北方民族の世界観

2020.7.18-8.23

会場 当館特別展示室

#### はじめに

今年度は北方民族博物館開館30周年<sup>イヤー</sup>として、各種イベントを挙行する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため全ての事業に見直しをかけ、特別展のオープニングセレモニーも取りやめるなど縮小の方向になりました。全国で数多くの展覧会が中止になっていることを考えると、特別展を開催できただけでも非常にありがたいと思いました。

テーマは30周年にちなみ、初代館長の大林太良先生のご専門のひとつであった精神世界をとりあげることにしました。また、当館30周年の活動報告として、開館以来おこなってきた資料収集の成果を紹介する意味で、展示資料を全て当館の所蔵資料で構成しました。

北方諸民族の暮らしのなかで重要だったのは、食料を手に入れることです。このため、効率的に獲物を捕らえるための道具が作られたり、協力しあって捕獲し、分け合ったりする社会が形成されました。また寒さという自然環境を克服するために、暖かな衣服を作り住居を整える工夫がされました。長い年月をかけて動植物に関する知識を蓄え、次代に伝えてゆくことも行われていました。

しかし自然に頼る暮らしは不安定なものです。このため、不安を解消し、自然界からの恩恵を確実なものにするための精神的なよりどころ、「よすが」となるものが必要とされました。

北方民族の間では、あらゆるものに靈魂（神）が宿るとするアニミズムという世界観や、シャマンとよばれる特別な霊能者を中心としたシャマニズムという世界観が共通してみられます。

本展では、アニミズムとシャマニズムを軸に北方民族の世界観の一端を紹介しました。

#### 動物との関係

安定して食料を得るためには、獲物となる動物との関係を良好に保つ必要があると考えられていました。よく知られているのが、クマがまたやってくることを願っての霊送り儀礼（クマ送り）です。動物との関係のコーナーでは、クマ送りに関する資料を展示しました。

また動物の一部を身につけることで、その動物がもつ特性が授けられるという考えを紹介するため、動物の歯や牙から作られた資料も展示しました。



クマ送りの装束をつけたクマ（サハリン・アイヌ）

#### 削りかけ

北海道からロシア・アムール川流域にかけて、木を薄く削った削りかけとよばれるものがあります。北海道アイヌのイナウがよく知られています。ウイльта語ではイッラウといい、この言葉がアイヌ語に入ったとされています。

削りかけは、削ったそのまま祭壇などに使われることもあります。編んでかぶりものや帯に仕立てたりすることもありました。清めるというような意味で、道具と一緒にしたり、部屋の四隅に置かれたりすることもあります。

#### シャマン

シャマンは霊と交信して病気を治療し、未来を透視する能力があるとされています。シャマンは男性も女性もおり、世襲だけではなく、例えばサハでは前に亡くなったシャマンの魂に選ばれた人がシャマンになるといわれます。

北方のシャマンは木枠に動物の革を張って作った太鼓を、多くが動物の毛皮を貼ったばちで打ち鳴らしながら、霊と交信することが共通しています。サミのばちは、トナカイの角で作られています。

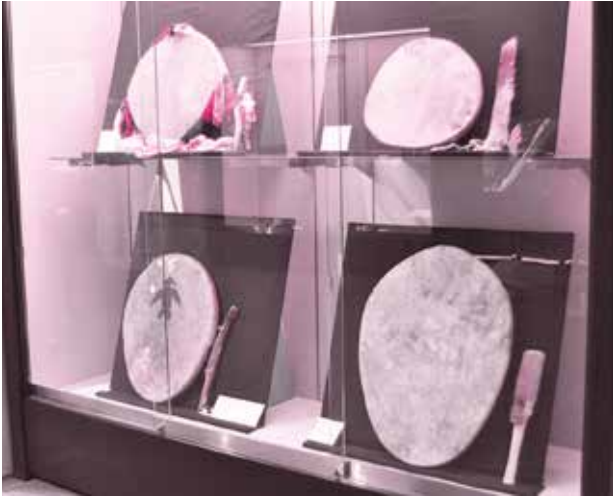
シャマンの道具には金属がよく使われます。これは金属が悪霊から身を守ると考えられているためです。衣服に直接縫い付けたり、腰にぶら下げたりします。

展示では、ハルハ、ブリヤート、ウデヘ、ウイльта、ナーナイのシャマンの衣装を紹介しました。

ハルハとブリヤートの衣装は、シャマンの顔を隠すひもの束が特徴になっています。ウデヘのシャマンの衣装にはヘビとカメの形がアップリケされています。このように、アムール川流域の諸民族のシャマンの衣装には、しばしば、爬虫類や両生類の姿がみられます。水の世界にも陸の世界にも通じるということの象徴のようです。

シャマンの道具である太鼓はウイльта、ブリヤート、ウ

デヘ、コリヤークのものを4点展示しました。4点とも、取っ手はついておらず、裏面にわたしたひもの中央を持つようになっています。ウイルタの太鼓にはシャマンの守護霊である鳥の形が描かれています。



シャマンの太鼓 左上から右回りに、ブリヤート、コリヤーク、ウデヘ、ウイルタ

### 木偶・お守り

木偶やお守りがシャマンによって作られました。病気治療や、旅の安全、飼育するトナカイの群れを守るためなど、さまざまな目的を担っています。

コリヤークやチュクチでは火をおこすときに用いる、人型をした火きり板が家を守るとされていました。

北方民族の人形には、しばしば目口が描かれないことがあります。木偶にはつけられ、また直接この口に供え物が与えられたりもしました。

木偶やお守りは、現在は観光土産品やアート作品としても製作されています。

### 新しい宗教

北方民族の間でもキリスト教、仏教、イスラム教等が知られるようになります。北方民族にとっての新しい宗教が広まる過程では、シャマンが弾圧されたり、シャマンの道具類が壊されたり、人びとの名前がキリスト教にちなんだものに変えられることもありました。

先住民社会が国家にとりこまれると、その影響も受けるようになり、生活様式の変化もあって、北方民族の世界観にも大きな変化がもたらされました。

それでも、古くからの世界観は現在も残っており、一度姿を消したかにみえたシャマンが復活している地域もあります。

このほか仮面や神に酒をささげる道具など、全部で約100点を展示しました。



上から北海道アイヌの捧酒箸、ハルハの乳棒げ具、サハの馬毛製儀礼具

### 展示映像

1998年に、ロシアのアムール川流域にあるナーナイの村、アチャン村でシャマンの家を訪問して撮影した映像を上映しました。シャマンは儀式の前に音がよく鳴るように太鼓を火であぶります。部屋にいる人が全員シャマンの金属器付き腰飾りを身に着け、太鼓を鳴らしたあと、シャマンの女性が登場します。

### 特別展図録

特別展にあわせて、特別展図録を発行しました。世界観を実物資料だけで表現することが難しいため、関連する事柄について多くの研究者に執筆いただきました。

また当館の津曲敏郎館長は、「シャマン」、「シャーマン」という言葉について検討し、ツングース諸語のエベンキ語南方言がロシア語に伝わり、そこから世界中に広がっていったのではないかとの説を述べています。

### <特別展図録目次>

- ・北で生きるよすが 笹倉いる美
- ・サハのシャマニズム ネウストローエヴァ ナターリヤ
- ・動物の力を授かる 井上敏昭
- ・シャマンの語源をめぐって 津曲敏郎
- ・民話・神話にみられる北方の食と世界観 山田仁史
- ・宗教を名づける
- アニミズムその他いくつかの「イズム」について 堀 雅彦



- ・「文化の免疫システム」としてのシャーマニズム  
—シベリア・モンゴルにおける狩猟・牧畜世界と現代をつなぐ 島村一平
- ・千島アイヌとロシア正教 宮本花恵

### 関連事業

関連事業として、8月8日に特別展の解説講座を、8月15日に上映会「北方民族博物館シアター 夏」を開催しました。上映会では、ラトビアの映像作家、アンドレス＝スラーピンシュの遺作となった、東シベリア・極東の諸民族のシャーマニズムを記録した作品「夢見の時 (Siberian Shamanism)」(1980-1990)を上映しました。ソ連においてシャーマニズムが弾圧の対象であった頃のウデハ、サハ、エベンキ、チュクチなどの世界観が紹介されています。



特別展解説講座の様子

ポスター、ちらしに描かれたイラストは、サハ出身のイラストレーター、版画家のネウストローエヴァ ナターリヤさんにお問い合わせしました。サハのシャーマンが、動物の形をした多くの守護霊を従えた、迫力あるものです。

一見すると奇異な雰囲気のある資料も多く展示していましたが、観覧した方たちからは、むしろ現在の自分たちに通じるものが多いとの感想がきかれました。



サハのシャーマン：

画 ネウストローエヴァ ナターリヤ

(学芸グループ 笹倉 いる美)

### 講座

## 北海道の古代集落遺跡をめぐって： 炉とかまど

2020.9.13 10:00-11:30

講師：西脇対名夫氏

(北海道教育庁文化財・博物館課課長補佐)

北海道東部には擦文文化(8~12世紀ごろ)の竪穴住居の跡が窪んで残っており、時には一か所に数百軒以上も集中することがあります。

この古代集落遺跡について北海道教育庁で埋蔵文化行政に携わる講師にお話をいただきました。

擦文文化の正方形で4本の柱とかまどを持つ竪穴住居の形は本州から導入されたものですが、かまどのほかに中央に炉があり、二つの火床を持つことが北海道の特徴です。近年、擦文に続く13~17世紀ごろの平地式の住居跡が発掘されるようになり、その多くにも二つの炉が見られます。この特徴は、擦文文化から引き継がれたものでしょう。

近代のアイヌの家には一つの炉しかありません。しかし出産のときだけは、戸口に近い位置に別の火を焚いて、産婦のための炊事をこちらで行い、一方夫はこの火を避ける風習がありました。これを、かつては(おそらく17世紀ごろまで)、夫と妻が常に別々の火を使って炊事しており、その後この風習は廃れたが、出産の時にだけ古いしきたりが残っていたのではないかと講師は説明されます。アイヌには死者の家を焼き払う風習もありました。アイヌの間では母の血筋を同じくする者は結婚できませんでした。妻と夫はそれぞれの母から受け継いだ別々の火を管理しており、どちらかが亡くなると残された者は死者の火を世話することができないので、その消える運命にある火で家を焼く「火の葬式」が行われたのではないかとの説も紹介されました。

擦文文化の住居も、近代アイヌと同様に、夫婦を核にした家族の住まいと考えられます。しかし子細にみると火床の在り方も異なっており、ここから擦文社会の組織と近代アイヌの組織が異なっていたことがうかがえます。この擦文の社会組織が、大規模な集落遺跡が道東に残された背景にあるのではないかということでした。

(学芸グループ 笹倉 いる美)



西脇対名夫氏

## ウェルカムケース

# ハマニンニクのバスケット

2020.8.1-10.30

会場：当館ロビー

当館では、常設展示室入口前にウェルカムケースというミニ展示を設置しています。年に数回展示替えをしているので来館した際にはぜひご覧ください。

今回のテーマは「ハマニンニクのバスケット」です。イネ科のハマニンニク（学名：*Leymus mollis*、別名：テンキグサ）は、北海道から九州、およびシベリア、北アメリカに広く分布している海浜植物です。これらの地域からエスキモー、北海道アイヌ、アリユート、コリヤークのバスケットを展示しています。ハマニンニクの採取時期は地域によって異なりますが、概ね夏から秋にかけて採取します。

北方諸民族のバスケット作りの基本的な技法は交叉組織、巻き組織、<sup>もじ</sup>振り組織の3種類です。このうち巻き組織は「コイル巻き」や「コイルング」とも呼ばれます。この技法は北海道の東部、千島列島からアリューシャン列島やアラスカ、北アメリカ北西海岸などの北方諸民族でも広く共通しています。



写真1 D28.13.4 エスキモー  
アメリカ/アラスカ 24cm×27cm

写真1はエスキモーの蓋付きバスケットで、アラスカ州政府日本支局が所有していた資料です。平成28年（2016年）の閉鎖にともない当館へ寄贈されました。巻き組織の技法が使われています。アラスカでは、秋遅くに集団でハマニンニクを採集します。

エスキモーのバスケットには、装飾がほどこされているものがあり、染めた素材を使うこともあります。写真1の資料には装飾に海獣の腸が使われています。編み目の上から腸が巻かれているため、模様から地が透けて見えます。



写真2 H18.23 北海道アイヌ  
北海道/登別 7.3cm×12.1cm

写真2は、知里眞希氏が復元した「テンキ」と呼ばれる蓋付きバスケットです。本資料とともに、知里氏が復元した取手付バスケットも展示しています。アイヌのバスケットには、ハマニンニクのほかにシナノキの皮やガマも使われました。

登別市に在住していた

知里氏は、白老町の旧アイヌ民族博物館で開催されたドイツ・コレクション展で「テンキ」と出会い、製作を試みたそうです。知里氏は7月末から8月の始めにかけて刈り取り作業をし、葉を選り分けて乾燥させ、芯の部分のみを使うなど素材から復元を試みました。



写真3 H3.2 アリユート  
アメリカ/アリューシャン列島  
1890年頃 17.1cm×18.4cm

写真3は、アリユートの毛糸編み込みバスケットです。アリユートのバスケットの特徴は、底のほうから、<sup>もじ</sup>振り組織で編まれるものが多い事と、編み目が非常に細かく緻密である事です。アリユートのバスケットは欧米との交易品の一つでした。

このバスケットには、赤い毛糸が装飾として編み込まれています。

写真4は、コリヤークの裁縫道具容器で、リディヤ・



写真4 H13.42 コリヤーク  
ロシア/カムチャツカ 10cm×23cm

チェチュリーナ氏 (Lidiya Chechulina) の製作です。コリヤークは、ロシアのカムチャツカ半島北部から中部、マガダン州にかけて居住しており、トナカイ遊牧を行うトナカイ・コリヤークと海岸地帯に定住する海岸コリヤークの集団に分かれます。バスケットは主に海岸コリヤークによって作られます。

写真4の資料には横糸にハマニンニクが、縦糸にビニールのような素材が使われています。このように巻き組織で編む場合には、縦糸に別素材を組み合わせることもあります。また底辺部分にアザラシの皮が使われており、地域の特徴をみることができます。



写真5 展示風景  
(学芸グループ 宮本 花恵)



## ロビー展 石の知る辺

～アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランド、  
シネコック・インディアン・ネーションに鯨の物語をたずねて～

人と鯨の間の物語への関心から、国内外さまざまな土地を訪れてきた美術家・是恒さくら氏は、各地の鯨にまつわる採話を刺繍の挿絵とともに纏めた小冊子シリーズ『ありふれたくじら』を制作・発行してきました。

最新号となる『ありふれたくじら』Vol.6は、アメリカ・ニューヨーク州ロングアイランドの先住民、シネコック・インディアンと鯨の結びつきを伝え、2020年8月に発行されました。

本展では、是恒氏のロングアイランドへの旅の記録の写真とともに、現地で採話されたエピソードやそこから着想された刺繍作品を紹介します。

■会期 令和3年(2021年)1月5日(火)～1月24日(日)

■会場 北海道立北方民族博物館ロビー

■観覧料 無料

■共催 北海道立北方民族博物館  
東北大学東北アジア研究センター

### ◇関連事業

■解説会 1月10日(日) 10:00～11:30

講師：是恒 さくら (美術家)

## ロビー展 オホーツクシリーズ⑩ 北の状景から

オホーツク地域の文化的活動を紹介・発信する展示イベント「オホーツクシリーズ」の14回目として、オホーツク地域の魅力を伝える写真作品を紹介します。

■会期 令和3年(2021年)1月5日(火)～1月24日(日)

■会場 北海道立北方民族博物館ロビー

■観覧料 無料

■主催 北海道立北方民族博物館



是恒 さくら

原画刺繍『ありふれたくじら Vol.6 :

シネコック・インディアン・ネーション、  
ロングアイランド』

素材：布、糸 制作年：2020

(撮影：根岸 功)

## INFORMATION

### 行事報告

◆新型コロナウイルス感染拡大防止に対する取組について

当館では新型コロナウイルス感染拡大防止のため、常設展示の音声ガイドの貸出を中止しています。このためスマートフォン用の音声ガイドを作成しました(日本語、英語)。展示室入り口前にあるQRコードをよみとると音声ガイドを視聴できます。(なおご利用になれないキャリアもあります)

また、団体予約状況をホームページで公開しています。来館の計画時の参考にしてください。



展示室前にQRコードを設置しました。

※「QRコード」は株式会社デンソーウェーブの商標登録です。

◆シンポジウム中止のお知らせ

例年開催されております北方民族文化シンポジウム網走は新型コロナウイルス感染拡大と収束の見通しがたたない状況をうけ、本年度の開催を中止としました。

◆エントランス改修工事

当館では令和2年(2020年)8月1日から12月18日までエントランス改修工事のため正面玄関は使用できません。駐車場側の入り口をご使用ください。正面玄関付近は工事車両が出入りしますのでお気をつけください。



工事車両にご注意ください。



工事に伴い受付も移動しています。

◆はくぶつかんクラブ

9月19日(土)、「シラカバの皮でつくるペンスタンド」(講師：当館解説員 平栗美紅)を開催しました。



独特の風合いが魅力のシラカバ樹皮

北方民族博物館だより

No.118

令和2年(2020年)9月25日発行

編集・発行 北海道立北方民族博物館

〒093-0042 北海道網走市字潮見309-1

Tel 0152-45-3888 Fax 0152-45-3889

e-mail: tonakai@hoppohm.org

http://hoppohm.org

指定管理者

一般財団法人北方文化振興協会